# 太平洋戦争−インパール（ウ号作戦）第二部

元新発田駐屯地援護室　佐藤　和敏

左突進隊長（宮崎少将）は、直に左猛進隊長（歩五十八聯隊長、福永大佐）に、中猛進隊を併せて指揮させ、当面の敵陣地を攻略すべきことを命じた、そして第一中隊長竹田中尉に機関銃及び大隊砲各一を附して、サンジャック西南方の鞍部に於いて、インパール～サンジャック道を扼守して我が左突進隊の右側背を援護させた。

右猛進隊（森本少佐）も、二十四日夕新戦場に到着したが宮崎少将は之を当面の戦闘に注入することなく、遠くトヘマに派遣しインパール～コヒマ道の遮断を命じた。

敵は二十四日から毎日輸送機を以って、盛んに空中補給をしていた。然し彼我の第一線が極めて接近していたので其の時の風向きの状態で、半数以上も我が方の地域内に落下して来た。糧食は赤色、弾薬は黄色、飲料水は白色の落下傘で識別されており、この空中補給を実施すると二、三十分で敵陣地の山は満開の花が咲いたような美観を呈した。

左突進隊長より攻撃命令を受けた福永聯隊長は、第三大隊長に直に第二大隊の左に展開し、敵陣地攻撃を命じた。

先頭中隊である第十中隊は直ちに攻撃任務を受け、左正面から白昼堂々と攻撃を開始したが、敵陣地直前で膠着状態となった。この状況を見て、更に大隊予備であった第十一中隊に攻撃命令を下した。時に午後二時であった。其攻撃命令の内容は、第十一中隊長は教会下の凹部で、第六中隊を併せ指揮し本二十四日薄暮を期し第二大隊機関銃中隊の支援射撃の下に敵陣地に突入することであった。然し本薄暮攻撃は準備時間過少にて、上下左右の連絡不十分のため第六中隊のみが機関銃の支援下に突入したが、結局不成功に終わった。

同夜半二時ころ、敵陣内から数名のものが駆け下りて来たが、これは第六中隊秋山軍曹以下四名で、薄暮攻撃の時敵陣内に突入し教会の中で友軍の来るのを待っていたが、後続なしと判断し逆に脱出してきたものと判った。

この秋山軍曹の報告によって教会附近の敵陣内の状況や障害物の状況が判明し大いに参考となった。

待望の聯隊砲が到着し、二十五日の払暁攻撃は、二十五日薄暮に聯隊砲支援のもと統一攻撃に変更された。

二十五日朝、聯隊砲中隊長　村井中尉は聯隊砲一門と共に戦場に到着、宮崎少将に申告した。中隊長は以前宮崎少将専属の副官であった。「御苦労々、少数の人員で悪路をよくもこんなに早く到着したな、さぞ苦心したろう、弾薬は何発あるか」「十六発です。誠にすみません」「よしよし、この砲弾は聯隊砲中隊の努力の結晶である。我が一発は敵の一万発にも値する、無駄に使っては申し訳ない。大切に使うぞ」このとき中隊長は目頭を熱くしていた。

山砲兵大隊の山砲一門も午後戦場に姿を見せた。

二十五日薄暮攻撃から、引続き翌二十六日払暁まで連続、突撃に突撃を実施した。其結果敵第一線陣地は相当奪取することが出来たが、何分にも我砲兵の支援は発射弾十発に満たず、全く名ばかりの支援であった。我戦闘人員は急激に減少するに反し、敵の銃砲火は愈々猛烈を極め、遺憾ながら爾後の戦果拡張は至難となった。

第十一中隊の如きも、西田中隊長、敵手榴弾で重傷を蒙り、戦闘員二十名足らずとなったので、やむなく突撃発起位置に後退し態勢を整理せんとするや、尾形曹長、梅田軍曹、笹川軍曹、山田兵長の四名は、中隊長と共に現位置に残り最後まで頑張る旨申し出てきた。

又負傷者中には動けないながら「第十一中隊頑張れ」「第十一中隊万歳」と叫んで戦闘員を激励している者があった。

其の後一時間程の中に、笹川軍曹が先ず狙撃されて戦死し、西田中隊長と梅田軍曹が敵手榴弾にて脚部に重傷を負い、山田兵長も西田中隊長を担いで後退中狙撃されて戦死した。

当時第三大隊で生き残りの将校は重傷の西田中尉、第九中隊の青木少尉の二人だけであったが、青木少尉は毫も屈せず生存者全員を以って突撃を敢行せんことを西田中隊長に意見具申をしたが、彼も其の直後銃撃され戦死した。

二十六日午前零時半頃、第三大隊との連絡を終わって帰隊した第二大隊本部、長里曹長以下三名は復命中敵迫撃砲の集中火を浴び、一瞬にして散華した。この時大隊附枝並中尉も脚部に受傷した。

二十六日午前四時頃、第六中隊（代理長、金子少尉）は第十一中隊と共に敵陣内に突入し戦果をあげたが、金子少尉は遂に敵陣内で壮烈な戦死を遂げた。

二十六日昼間は一日中撃合い合戦で、特に敵の銃砲火は日没頃から夜半にかけて熾烈を極め、むしろ正気の沙汰とは思えない程無茶苦茶に撃ちまくっていたが、それが午後十二時以後ピッタリと停止した。怪しいと感じ第一線から斥候を派遣したところ、敵陣内に敵影を見ず、敵は南方ジャングル内に潰走せることを確認した。時に美しい月が夜空に輝い

ていたのが印象的であった。

　この戦闘間、一度インパール方向から戦車三～四輌を先頭として、兵員及び軍需品を満載した五～六十輌の自動車部隊が前進して来たが、右側背掩護の任にある竹田中隊は敵を至近距離に引き付けて、一度にあらゆる火器を以って猛射を浴びせたところ、敵は全く周章（あわてふためく）狼狽してインパール方向に退却してしまった。

　爾来、サンジャック戦終了迄一度もインパール方向からの敵の来襲はなかった。其の後も敵は一度ひどくたたかれると、同地には再び出て来ないのが常であった。

　二十七日、予期した敵の来襲もなく伴中尉以下戦死者の処置等戦場清掃も順調に出来た。本戦闘に於ける鹵獲兵器、弾薬糧秣共に実に莫大なものであった。尚、捕虜約百名の外軍馬三十頭、自動車五輌も捕獲した。わが方の死傷は約五百名であった。

　宮崎少将は戦力の回復手段として装備の改変を実施させた。

　即ち爾後、補給の望み薄き日本の各兵器、弾薬に代って将来各戦場にて補充が出来ると予想される鹵獲兵器、弾薬を出来るだけ多く装備することを奨励した。

　幸い各大隊は、本戦闘に参加していない駄牛担任の一個中隊を有し、且つ生き残りの将兵は、この五日間の激戦の貴重な経験を持っているので、次期作戦に於いても十分活躍し得る自信を持った。

　翌二十八日、我が左突進隊主力はウクルル附近を出発し、ウクルル～ガジヘマ～トヘマ道（本道はジープ通過可）を急進し四月一日午後三時、シクフメイに到着、ここで先遣隊の第一大隊副官、道家中尉が鹵獲ジープ数輌をもって連絡に来て、先遣隊の其の後の状況、、特にトヘマ附近の戦況の報告を受けた。

（トヘマ附近第一大隊の戦闘）
　先にトヘマに先遣された第一大隊（長、森本少佐）主力は、険難な悪路を踏破しつつ西進し、三月三十日十時頃トヘマ東方約四キロメートル附近に到着した。

　大隊長は同地にて敵機甲部隊がトヘマに於いて休止中なるを霧の晴れ間に発見し、直ちにこの敵を攻撃するに決し、全員駈足にて前進した。これは敵に準備の余裕を与えない為である。十二時頃トヘマ三叉路東方一キロメートルの森林内で敵に遭遇し午後六時頃迄激戦を交えた。敵は軽戦車四、自動貨車約三十を遺棄して一部を以ってコヒマ、主力を以ってインパール方向に退却した。

　本戦闘で第二中隊長、石川中尉は突撃の際、率先陣頭に起ち壮烈なる戦死を遂げ、第三

中隊長、三木中尉も又、突撃の際負傷した。

　我が方の損害は石川中尉以下約二十名であった。

　宮崎少将はシクフメイに於いて四月二日夕迄に、マオソンサンには約一個大隊の敵ありとの情報を得て、明早朝之を攻撃するに決し其の部署を命じたが、夜半に至りマオソンサンの敵は日没後コヒマ方向に退却したのを知り直ちに隠密裡に、左突進隊に非常呼集を実施して、マオソンサンに再び急進した。

　一時間足らずで万事前進準備が完了、直ちに発進し四月三日朝マオソンサンに到着し、ここを根拠としてコヒマ攻撃の為の敵情地形捜索に専念した。

　コヒマ附近の敵情捜索の為、第七中隊斉藤少尉以下三組の将校斥候を派遣し、宮崎少将は心を鬼にして「将校斥候は総て敵に撃たれるまで前進せよ」と命じた。

（左突進隊の独力攻撃）
　斥候の適切なる報告は情報主任、浜中尉の努力によって、四月三日夕迄にコヒマ附近の敵は多くても一個旅団で目下動揺しているとの判断が出来た。この好機を逸することなく速攻すれば、コヒマ奪取の公算大である。もし数日行程が遅れている師団主力の到着を待つならば、いたずらに戦機を逸するものであると判断し、速やかに左突進隊独力で攻撃を決心、師団長に状況並びに決心を報告して其の許可を貰った。居り返し「許可する」との返電を得て次の要旨のコヒマ攻撃部署を発令した。

一　第一大隊（第二、第四中隊欠）はトヘマから本道西方山地を経てジョセマ附近に向い前進、尚その歩兵一小隊（鹵獲重機一を附す）をトヘマ附近に残置し、主としてインパール方面に対し師団の左側背を掩護させる。第一大隊のトヘマ通過後は左突進隊長の直轄となる。
二　歩兵第五十八聯隊（第一、第三大隊欠）は本道方向からコヒマに向い前進。

三　第三大隊はマオソンサンから本道東方高地線ゲジマ～チヤヤナハンを経てコヒマに向かい前進。

四　歩兵団長は歩五十八主力と同行する。

　四月四日、本道方向の歩五十八主力はアラズラ高地線の敵第一陣地帯を攻略した後、続いて其の北方高地線に進出して、次の攻撃を準備した。

　右第三大隊（長、島之江少佐）は五日夜、コヒマに突入し、新旧両部落共完全に占領したとの報告を受けて宮崎少将は「第三大隊は直ちにネルヘマ（コヒマ北方約四里）に向い

追撃を敢行すべし」と命じた。

　歩五十八主力は六日朝、当面の敵の一拠点である「ヤギ」高地を奪取したが、尚其の北方高地（コヒマ西南方高地にて三叉路高地と呼称）の敵陣地は頑強に抵抗し我が攻撃は失敗に帰した。

　宮崎少将は、この縦深大なる三叉路高地の攻撃に第二大隊のみでは兵力不足であると感じ、先にネルヘマ急追を命じた第三大隊に直ちに反転して三叉路高地の敵陣地を東北方から攻撃するように命じた。爾後我が左突進隊正面ではこの三叉路高地の攻防戦が主体となり、日を重ねるに従って、漸次激烈の度を加えるようになった。

　第一大隊主力は、険悪極まる山岳地帯を踏破して、七日以来ジョセマ附近の要地を確保して善戦していた。この大隊が日本陸軍の中で印度の一番奥地まで進攻した部隊となった。

　コヒマ附近の敵は、当初一個旅団程度のもので其の陣地もアラズラ高地線を第一線とし、コヒマ周辺に掩蓋を有し簡単な鉄条網を設備した野戦陣地の域を脱しない物であった。

　アラズラ高地やコヒマ周辺の各所は、未だ運搬して来たばかりの真新しい有刺鉄線を始め各種の防備資材が山積放置してあった。又、コヒマ新市街の敵の幹部用と思われる官舎地域の、混乱し退却した跡から見て、敵がわが軍の奇襲的突進に対し如何に狼狽したかが窺われた。即ち我が戦略奇襲作戦は見事に成功した。

　コヒマ附近に於ける、敵の兵器、弾薬、被服、糧秣、ガソリン等の軍需品は実に莫大なものがあったが、我が軍の適切な処置を欠き、其の大部分を敵の爆撃により烏有（全く無いこと）に帰してしまったのは、わが方の補給が殆ど望みの無い状況に鑑み、全く惜しい限りであった。

「新発田聯隊史」より